

漢字・語い教科書作成のためのメモ

——中学校のばあいを中心に——

粕谷倫生

知っていることなど、ちっとも偉いことではないなど言ってみるのだが、国語教育のプロとしてこれではいけないと思う。

明治の初め、文部大臣森有礼は、英語を国語にしようと考えた。志賀直哉は、フランス語にしようと提案した。日本ローマジ会、カナモジカイは、漢字の全廃をめざして今日に到っている。漢字の母国、中国でも、漢字の複雑さは教育の普及を遅らせるということで、略字などが考えられている。中国があれだけの古代文明を築きあげながら、以後の発展がなかったのは、五万ともいわれている漢字を覚えるのに労力がかかりすぎるためだったというのも聞いたことがある。

実際、漢字否定論者は多く、その主張も様々であるが、主なものとして次のようなことがある。「青春時代における学習負担の増大」(英語はたった26文字覚えればよい。しかも簡単な文字である。)
「コンピューターを使った情報処理に適しない。」(非能率・コスト高) 特に後者は、梅棹忠夫氏と大野晋氏の対談を読んでもみると、国家間の競争という点から深刻な問題のようである。(大野晋編「対談日本語を考える」中公文庫 昭和五十四年十月十日発行)

反面、当用漢字では少いとして、漢字を支持する立場がある。表現としての漢字の効用(豊かさ)と親しみ、サビの快感、その造語

私の勤めている中学校で、国語の学力が低い(つまり試験の点が悪い)ので、全校一斉の漢字テストをして実態を把握し、定期的に漢字テストをしたらどうかという提案が、国語科以外から出された。国語の学力を短絡的に機械的な漢字テストに結びつける考え方に問題はありますが、国語科のためにそのような時間をとってくれることに私は賛成であった。結局、その話は反対意見が出たり、国語科の消極的態度もあって、うやむやになってしまった。

私としても漢字教育について考えざるを得なくなりましたわ。私としては、中学校において漢字教育をする場合の手順・方法といった点について、急いで読んだ何冊かの本を私なりにまとめる形で述べさせてもらう。また、一年くらいかけて私自身の漢字教科書をつくってみるつもりだが、その原案も少しのせてみた。まず「漢字」について少し述べてみる。

漢字が並んでいるのを見るとなぜか嬉しくなる、という人にたまに出会う。そういう人は、やはり漢字が読めて書けて、もちろん漢文などは得意である。私は、国語を教えているということで漢字の読み書きなどをよく聞かれるが、恥をかくこと度々である。漢字を

力・機能（英語より早く読める）、漢字を廃止すれば、今までの文化が反古になるといった主張がある。確かに、漢字恐怖症の私でもなかなか捨て難いものであることはわかる。

ただ、巨視的に見れば、「いかに漢字そのものの性格として近代化に抵抗し封建性を擁護するものを含む以上、それは世界史の大勢からいってついに亡び去るものと思われる。」（倉石武四郎「漢字の運命」岩波新書一七〇ペ）ということが、言えるのではないかと思う。しかし、それは百年や二百年の間のことではないだろうし、今まで述べたような点をふまえて、私は漢字教育をしなければならぬ。そこで、漢字指導をいくつかの段階に分けて、順を追って述べてみる。

2

まず、漢字を文字として教える段階を考えてみた。いわゆる形・音・義を教えるのである。従来、教科書に出てくる漢字を、機械的にマル暗記する傾向があったが、漢字の特質に注目し、そこから方法論を導き出す。

漢字は、英語やひらがななどと違って表意文字であり、その字形・読み・意味が関連性を持ち、体系を持っている。この点に着目し、いくつかの漢字をまとめて、一つの観点から教えたほうが記憶しやすい。例えば、その観点は、意味の系列・語構成の系列・文字構成の系列などがある。形声文字の場合は、「へん」や「つくり」の同じものという観点から、同じ意味、同じ音を表す漢字を教えるなどの方法が考えられる。

この場合、語源についての知識の必要性が出てくる。字形・読み・意味を関連づけるものとして語源があるのである。語源自体は、小・中学校の段階では指導目標とはならないだろうが、それを知ることは漢字の収得を容易にし、漢字に対する親しみ興味などを持たせ、漢字の背後に中国の歴史を感じることは、漢字に対する認識を変えらるだろう。指導者が語源を熟知しており、必要に応じて生徒に与えることは、思わぬ効果を生むものである。

ここで私は、漢字を文字として教える段階として、字形・読み・意味を教えるとしたが、また別の考え方もできる。田中久直氏は、その著書「これからの漢字指導」新光閣書店の中で、漢字の読み書き分離学習を主張している。「漢字の読みは生活的な学習が中心となり、書きは練習的な学習が中心となる」として次のように述べる。

「ある漢字を新しく教えるという場合、まず読みを文脈の中で考えさせる。またそれまでの生活経験から考えさせる。そこから正しい読み方に導いていくようにする。そこでまた書きを教える。文字としての組み立てをどうとらえて、どんな筆順で書いていくかなどを教え、練習させる。」（八〇ペ）

漢字を文章の中で教えるというのは重要な指摘だと思う。文脈推定で読みを考えるというのは、文の流れ、前後の文の意味を考えてその漢字の意味も考えているのである。

ここで私が考えさせられるのは、とりたてて漢字の読みや意味を教えるというのが、どれだけ効果があるかということである。読みについては、はっきりきまっておき、それを覚えればよい。文章の

中で読めなかったのは、まだ覚えていなかったからである。しかし、意味の理解は、そう単純なものではないと思う。それは、その語を使用することに通じる。その語を正しい文脈の中で使えばいいのであって、辞書と同じ概念規定を言えなくてはならないということではない。意味とは、自分のその語についての読書経験などから、複雑な形で所有しているように思う。だから教える場合には、ただ辞書の意味を与えるだけではなく、その語の様々な文脈の中で使われ方を文章の形で与えてやる必要がある。しかし、辞書の意味を与えることが全く無意味かという点、そうではないと思う。それは、その語についての経験をまとめたり、漠然としたその語の認識の核となったりするだろう。この問題は私にとっての研究課題である。

文字として考える段階において児童言語研究会の林進治氏は、次のように述べている。「漢字学習の基本としては六十三字をおさえればよいと思います。それを確実に身につけて、あとは組み合わせの法則をあきらかにして、形と意義を結んで理解させ記憶させるという方法をとれば、その習得はずっと能率的になります。(林進治著『言語要素とりたて指導入門』明治図書) 学習基本漢字六十三字という点が独自であり、小学校低学年で参考になると思う。」

3

文字として教える段階の次に定着化のための練習ということが、どうしても必要になってくる。私も小学校のころ宿題で、テレビを見ながら漢字をノートいっぱい書いた記憶がある。確かに漢字習得はある程度の練習量をこなさなければならぬが、ここでもいろ

いろな工夫が考えられるべきである。この辺は現場ではいろいろな形でやられているのではないかと思う。

私も大西忠治氏をまねて、五問テストなるものをやっている。詳しくは大西氏の著書『國語の授業と集団の指導』明治図書一九七〇年二月刊二〇五～二六ペ)をみてほしいが、班競争の形で班員全員がよい点をとらなければならぬこと、一回の出題が少いことなどがミソである。大西氏ほどうまくはいかないが、生徒もおもしろがってやっており、班の中のできない子に班員が勉強をやらせるのがいい。このような方法は無数にあると思われるが、結構それが授業に活気を与えたりもする。他にこのようなよい方法があったら知りたいものである。

4

文字として覚えた漢字を、言語生活の中で使えるようにしなければならぬ。朝日新聞の「いま学校で」にも書いてあったが、漢字は知っているが学力と結びつかない子供はいる。ことばとして身につけていないのである。私は、この段階は今まで比較的等閑視されてきたのではないかと思う。方法論を考えるのに大村はま氏の「やさしい漢字教室」は、大いに参考になる。

この本は四ページずつ一まとまりで、それぞれの視点から(例えば「二つの意味が一つの字で」「似ているのは形だけ」漢字を使いこなす力をつけるようになっていく。特色の一つとして、文章の中で書かせることがある。大村氏は「漢字は、どうしても、ことばとして、文の一部であることばとして勉強しないと、使いこなせない

ようです。」(八〇九ペ)と述べている。第二に、熟語の形で書かされている。第三として、似たような形や音を持っており、間違いやすい漢字もいっしょに与えている。四つ目として、熟語を考えて書かせる問題もある。これなどおもしろいと思うが、大村氏は「あらわしたいことがらや考えがあって、それをあらわすことばをまず考え、それからさらに漢字を使って書く」(一〇ペ)ことも重要な勉強だと述べているが、これなど語い教育にもなっている。

5

次に生活の中の漢字指導がある。倉沢栄吉氏は次のように述べている。「作文の中になるべく多くの正しい漢字を使おうとする習慣と態度。読み物の中にある漢字を恐れずやっかいがらずに読み進めようとする習慣と態度。この二つが根本である。漢字学力とは知識や暗記の結果のみにかたよらないで、基礎的な態度や習慣を重んじるべきである。」(『覆刻文化庁国語シリーズⅥ漢字』教育出版一九八ペ)生活の中で読んだり書いたりする場を、できるだけ多くくつてやる必要がある。特に漢字の読みや意味は、日常の言語生活の中で身につけてきたものがほとんどでないかという気がする。私は今、短作文をできたら毎時間書かせてみようかと思っている。これは文章力の育成を第一とするが、漢字指導も含めたいと思っている。

6

さて以上のことをいっつ行かうか。これだけのことを読解の過程で消

化することは不可能である。読解の過程で、漢字の何をどう教えるかという問題はあがるが、やはり漢字指導のための特設された時間が必要になってくる。また教科書とは違った漢字教科書が必要になってくる。今まで述べてきたことを基に、私なりの漢字教科書を一年間計画でつくってみたいと思っている。その原案の一部を挙げてみた。

今回は意味的関連を持った語として、中学でならう「心(下・小)の漢字」を対象とした。それを意味内容から次のように分けてみた。名称は便宜的なものである。「満足の気持ち↓愉・慶・悦」「不満足 of 気持ちを自己へ↓悔・惱・恥・忍・怒・懣・慨・思」「あなごの気持ち↓慢」「+」(プラス)の気持ちを他へ↓恋・慕・懷・憶」「-」(マイナス)の気持ちを他へ↓恨・怒・憎・憤・憾」「愛を他へ↓慈・恵・懇・惜・悼」「心の調和がとれている状態↓慎・恭・悟・憩・恒」「心が乱れている状態↓慌・忘・怠・惑・愚・惰」

なぜこのような与え方をするかというと、私自身、語い教育に興味があり、この漢字教科書でもしてみたいと思うからである。少し話がそれるが、語い教育について少し述べさせてもらおう。私は、言語の力とは使用できる語いをどれだけ所有しているかということではないかと思う。国語は何を勉強していいかわからない、やらなくてもできる、答えがいくつもある等、よく耳にすることであるが、そのたびに私は不愉快になる。国語教育自体が文学教育に偏りすぎて、言語教育がなおざりにされている気がする。国語教師のプロ性とは、詩に感動できる資質を持つということの前に、日本語の語いや文法あるいは古語についての豊かな知識を持ち、それを自由に使

いこなせるところにあるのではないか。

具体的に言えば、生徒の文章を評価する場合、国語科としては、どういうことばを、どのように使いこなしているかという点を、まず第一に評価の対象とすべきであると思う。別にむづかしいことばで書けとか、内容はどうでもいいと言っているわけではないが、極端に言えば、中身がからっぽであったり間違つた考え方をしているも、高度の語句を使いこなせるというのは一つの能力であると思う。その内容は別の次元の問題である。外界の事物、内面の心情を、より適切に表現できることばを所有し、使いこなせることこそ、国語教育の目標であるように思う。

語い教育にかえるが、ではどうしたら語いが身につくかという問題になる。私は今のところ、日本語の体系を与えることではないかと思つている。例えば、先の「心の漢字」の場合のように、われわれが普段使つている日本語の意味体系を知ることが、かなりおもしろいことではないかと思う。そこから日本人の民族性まで語が發展したら、これまたおもしろい。「心の漢字」で言えば、「不満足の気持ちを表す漢字」は、「満足の気持ちを表す漢字」より圧倒的に多い。これはどうしてかなど考えることも楽しい。もっと言えば、私は四月から日本語教育のいい資料はないかと、日本語と題にある文庫本を片端から読んでみて、目的のものは得られなかったが、「日本人における相対性」ということを思った。つまり、日本人というのは自己がなく、常に相手や状況との関係の中で自己を認識し、確認していくという特質を持っているのではないかということである。例えば、英語などと比べて、日本語は実にたくさんの一人称があり、

時と場に應じて使いわける。また日本には「自然」ということばがなかった。これは日本人が自然を対象として客観的に捉えることができず、没入してしまうからだというのも聞いたことがある。これらがあつていようがいまいが、あまり大きな問題ではないのではないか。要は、われわれが使用していることばの体系を知り、そこから日本人というものに考えを廻らしたり、日常使うことばに注意を払うようになればいいのである。このような時間があつてもいいと思う。

この語い教育については暗中模索の段階である。次に先に述べた「漢字教科書」の一部を示してみる。

7

〔慣〕1、(なりたち) 心と音符實(ふきだす意) とから成り、心中のうつぶんをはき出す、「いきどお(る)」意を表わす。

- 2、(対義語) ↑ ↓ ()
- 3、(意味) ①いきどおる。②いきどおり。③みだれる。④みちる。⑤ふきでる。

4、音：フン(訓)：いきどおる)

5、(筆順)： 憤・憤

6、(同音語)：噴・墳

7、(——線部を漢字に直せ。)

修学旅行で、こふんを見学した。辺りは公園になっており、ふんすいもあった。しかし、こふんは、昔からそのほとんどが泥棒によってあばかれてっていると聞いて、ふんがいた。

8、(——線部の熟語を考えて記せ。)

① 火山が爆発し、熔岩や火山灰をふき出した。

② あまりの侮辱に、頭にきて席をたった。

〔慕〕1、(なりたち) 心と音符慕ボ (さぐりもとめる意) とから成り、心にさぐり求める。ひいて、こいしたう意を表わす。

2、(対義語) ↓ (——)

3、(意味) 。したう

4、音ボ、訓：した(う)

5、(筆順) …… 艸 莨 莨 莨

6、(同音語) …… 募・暮・簿・慕・椀

7、(——線部を漢字に直せ。)

。原爆犠牲者の霊を慰める会が、しめやかに行なわれた。参加者をぼしゅうしたわけでなく、きぼとしてはそう大きなものではなかったが、それでも出席者めいぼには、かなりの数の名前が記されてあった。ぼひに祈りをこめ、亡き人へのついでに、いぼの情を胸に、ぼしよくの中を家路に向かった。

8、(——線部の熟語を考えて記せ。)

。私は、彼女をおもいしたう気持ちに胸に秘めて暮しておりました。

〔懲〕1、(なりたち) 心と音符懲チョウ (明らかにする意) とから成り、前非を知る意を表わす。

2、(対義語) ↓ (——)

3、(意味) …… ①こりる。②こらす。③あげる。

4、音…: チョウ、訓…: こ(らす)

5、(筆順) …… 微 微 微

6、(同音語) …… 微(※微)

7、(——線部を漢字に直せ)

。びねつが続くなど、病気のちようこうは確かに前々からあった。しかし、彼が入院するきっかけとなったのは、ちようかいめんしよくというちようばつの中のショックであった。彼の人生における敗北のとくちようは、巨大な組織の中で、自分のとくちようを過信して、世間を見る目が甘くなっていたことによる。

8、(——線部の熟語を考えて記せ。)

。よいことをすすめ、わるいことをこらしめる気持ちは、人間誰しも持っているものである。

〔惰〕1、(なりたち) 心と音符惰ダ (くずれる意) とから成り、力がくずれ、なまけ、おこたる意を表わす。

2、(対義語) ↓ (——)

3、(意味) ①おこたる。②おこたり。③従来のかせ。

4、…: ダ

5、(筆順) …… 惰 惰 惰

6、(同音語) …… 墮(※隨・墮)

7、(——線部を漢字に直せ。)

。「だみんをむさばるような、ただだせいで生きたいたいだな毎日、私を確実にだらくの道へと運んで行った。」これは、ある作家のすいひつの一節である。

〔概〕1、(なりたち) 心とつまる意と音とを示す既キとから成り、

むねをつまらせて「なげく」意を表わす。

2、(対義語) ↓ ()

3、(意味) : ①なげく。②なげき。③いきどおる。

4、音: ガイ

5、(筆順) : 中筆 横 横 横

6、(同音語) : 概 (※既)

7、() — 線部を漢字に直せ。

。一生をかけて成し遂げた研究のがいようを述べながら、
すでに白髪の老学者は、かんがいむりょうの面持ちだった。

8

「1(なりたち)」「3(意味)」は、角川の『新字源』からのものである。(なりたち)は、語源的なものをもっとわかりやすく書いてあるものを探そうと思っている。その他、大村はま氏の『やさしい漢字教室』、岡田進氏の『これなら楽しくできる漢字の教え方』

(太郎次郎社。一九七九年五月十二日刊)を参考にした。

思えばこの一年間、何もしないで過ぎてしまった。忙しかったわけではない。むしろ今までの生活と比べてあまりにも楽な毎日に驚いたくらいである。クラブ活動で汗を流すのは気持ちがいいし、生徒と遊ぶのも楽しい。特に勉強しなくても毎日が過ぎて行く。そうした日々には、私の広島での五年間が生きていなかった。私が誇れる唯一のものであるのに。また来年の今ごろも同じようなことを思うかもしれない。それはそれでしかたがないのかもしれない。少しずつやっていこうと思う。

——その他の主な参考文献——

。友野一著『漢字の教え方・学び方 五・六年編』さ・え・ら書房
昭和四十六年八月

。友野一・江崎留子著『先生と父母の楽しい漢字教室(三年編)』
さ・え・ら書房 昭和五十四年九月

。渡辺茂著『漢字と図形』日本放送出版協会

(千葉県市原市立五井中学校教諭)